郭上海先生全集

第十卷

郭上海全集

第十卷

岩波書店

野上彌生子全集 第十巻　第十八回配本（全二十三巻）

一九八一年十一月六日　発行

定価 三五〇〇円

著者　野上彌生子

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二-五-五
株式会社 岩波書店
電話 〇三(二六五)四一一一
振替 東京六-二六二四〇

印刷・精興社　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

© 野上彌生子 1981　Printed in Japan

目　次

江島宗通……五
故郷……四五
伯父……一〇二
青い夢……一三〇
海峡……一六八
橋……一九六
秋……二四七
屏風と文化使節……二八九
夏雲……三三一
小田の死……三七七

裸婦……三九三
蝙蝠……四二一
万里子……四四一
愛……四六一
後記……五〇一

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

小説十

迷路

(二)

江島宗通

染井の御隠居様なる江島宗通の日常生活は、天体の運行のやうに正確であり、太陽系のもろもろの遊星がそれを中心に動くやうに、彼においては能が太陽になつてゐた。

毎朝、四季を通じてかつきり六時半に起きる。しかし七時までは姿を現はさない。厠に籠もつてしまふのである。洗顔は厳寒中も冷水で、それをすますと、居間の床のまへに端坐して、必ず謡を一番うたふ。たいてい神物か修羅物に限られるのは、能の番組の規定を守るだけではない。それもかつきり八時ときまつてゐる朝食までにうたひ終るため、長いものを避ける意味もあり、もちろん無本である。二百番の能の型から囃子に練達して、廃曲になつてゐるものさへ、舞はうと思へばすぐ舞へるほどの彼には、なにをうたはうと謡本は要らない。声は幅があり、呂が利いて、堂堂と見事であるが、難をいへば艶に乏しい。観世流の節廻はしの、どうかして厭味になる繊細をそれが救つて、彼の謡に渋い燻し銀めいた調子を与へてゐる。

朝はイギリス風のたつぷりした洋食である。ベーコンに添へた二つの半熟卵、二切れのトーストのほかに、一皿のオートミール、薄塩でバタ焼きにした白味の魚、紅茶。それには牛乳も砂糖も入れないが、花の刺繍のある茶帽子に蔽はれた壺形のティ・ポットが、殆んど空にされてしまふ。起きぬけの充分な発声は、三十分の長い上厠とともに、こころと、からだの、二つながらのカタルシスであり、

胃の腑にも活潑に作用した。

食事が終ると、三柏がかつきり浮きでた黒の紋服に着かへ、舞袴をつけ、舞台の方で能がはじまる。謡が無本であるやうに、これとても師匠の要らぬ独り稽古である。舞台も本格的な建築で、白洲梯子のまへの鍵型の狭い空間をのぞき、演能の時には見所になる部屋に囲まれてゐたが、十二三年まへそこから火が出て、その部分の幾間かを焼いて以来、舞台は庭にむきだしになつた。彼はそれをもとの形に修繕する代りに、焼跡をも庭に取り入れ、向側に茶室めいた部屋を一つだけ造つた。月に一度万三郎を招んで舞はせる時には、そこが見所になり、彼がたつた一人で見物して、ほかには誰にも見せない。拝観禁止の蔭口があるのはそのためである。それまでの彼の能道楽は派手やかに、大がかりで、一門の親戚、知人が百人近くも招待され、五番だてなら五番、三番だてなら三番の能を、朝から一日がかりで彼は自分だけで舞つてのけ、弁松の二重弁当が一人残らずわたつたほかに、白木の箱入で、その日の番組に因んで拵へさせた藤村の打物の菓子が添へられた。それが打つてかはつて、今のやうな拝観禁止の状態になつたのは、失火以来のことである。火事のための単なる変化とは考へられなかつたが、ほんとのことは誰にもわからず、それも変人の変人たる証左の一つに数へられた。

昼飯まへの一時間に、はじめてその日の新聞に眼を通す。「朝日」と「毎日」の二つで、相場欄まで見残さない丹念な読み方である。そのあとの二時までの午睡は、どんな用事でも邪魔することができない。寝つくのも早く、「邯鄲」のシテの盧生が、寝台を型どつた作り物の一畳台に飛びこんだ途端、夢中の帝王らしく寛寛と眠つてしまふやうに、彼も用意された床に横になるや否や、一分の間もおかず熟眠する。覚めてから四時半の入浴までは読書に費される。もつとも多く読まれるのは歴史で、洋

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

の東西を問はず古代史に特別な興味をもち、日本に訳されてゐないものでも、彼自身にそれだけは自由な英語で読まれる書物は、たいてい集められてゐる。それに次いでは仏典である。また能楽の聖書たる世阿弥の著作は、花伝書をはじめとして、彼には愛読以上のものであり、信仰の厚いクリスト教徒の身辺に、つねに神聖な書物が見出されるやうに、十五畳の居間の、鴨居まで高い青貝蒔絵の棚に、机から手をさし伸ばせばすぐ取れる距離に、古い写本から新刊の註釈書まであまさず載つてゐる。因みに、彼は紫檀よりも、桑材を好み、経机ふうに両端のそつた机も桑である。

夜は和食で、油つこいものを朝よりももつと多量に食べる——その代り昼飯はひどく軽い——酒は飲まない。レッテルの古い年代を自慢に贈られる、西洋土産の本場の葡萄酒さへ自分では口にしない。

夜の謡は二番で、また大皷と笛が吹かれたり、打たれたりする。四拍子の中ではその二つにもつとも熟達してをり、好きでもあつた。しかし彼自らは、どうも囃子の方は苦手だ、といふ。これは謙遜よりも、一方の能にもつてゐる大きな自信を示す言葉で、たいていの職分の囃子方を小馬鹿にしてゐるのは、能の方で万三郎以外、他流のほんの二三の役者を除いては誰も問題にしないのと同じであつた。囃子方の仲間はそれを知つてをり、染井の御隠居は意地がわるい、とこぼす。能役者の方は、流儀以外のものは関係ないが、彼らは邸内の能には招かれるし、どこの舞台にも殆んど演じられない遠い飛んでもない曲を、急な好みとして所望され、大汗をかかされるからである。しかしそれも、五番だての能を彼がひとりで舞つた頃の昔話になつて、この節はそんな悪戯もやまつた。就寝は十一時である。外出は、能を見に行くか、それに関した用事のほかは殆んどしない。

昨日の太陽が今日の太陽であり、今日の太陽はまた明日の太陽であるやうな宗通の生活を、軌道か

ら一分一厘外づさず運転させてゐるのは、側室のとみである。馬込の百姓の娘で、三歳で生母を失つた彼を、乳母代りになつて育てた老女の部屋づきの小女であつたが、宗通の身辺につき添ふやうになつてから、もう三十数年になる。十五違ひで五十を出たが、産まず女のせゐもあつて年齢よりは若く、美人ではないが、京をんなに見るやうな色白の小柄で、程よく肥つて、柿のたね型の艶やかな黒瞳に愛嬌がこぼれた。なによりも恐ろしくあたまのいい女であつた。宗通が考へてゐること、望むこと、命じようとすることは、べつに長い言葉にする必要はなかつた。

「とみ。」

さう呼ぶだけで用事が足りた。たとへば、書見のあとで欲しがつてゐるのが煎茶であるか、抹茶であるか、舞袴といつしよに仕舞扇を揃へておくか、それとも舞扇か、修羅物か、三番目物か、また新聞を持つて来いといふのか、電話をかけろといふのか、富士見町の本邸へ今日使ひに出す筈の家令の平野を、もうやつてよいかどうか、夜の謡のあと大皷がすぐ打てるやうに、皮焙じの炭火をその晩はかんかん起しておくか、おかないか、それらのすべてが一切聞返しなしに処理される。それも気転が利き過ぎて小憎らしいやうなところはなく、待たせもしなければ、先廻りもしないで果されるのは、とみのあたまだけではなく、宗通の生活がそれほど極まりきつてゐたからともいへる。この厳正な暮らし方が、それこそ何十年となく珍らしく破られたのは、もう二月まへになつた二・二六の出来事の日であつた。

その朝、富士見町の秀通から電話がかかつて来た。食事がすんだあとで、宗通は定例の稽古のためすでに舞袴の姿になり、毎朝乾拭きで拭きこまれて、厚い檜の床が飴色にてらてらしてゐる舞台は、

取りまく庭に降りつづく雪と、冷たい清らかさを競ひながら彼の現はれるのを待つてゐた。富士見町にもその光景はテレヴィジョン程にもはつきりわかつてゐるわけで、そんな時刻にかければ、取りつがれもしないのを知りぬいてゐての電話であつた。

「おとみさんに。」

名ざしでかけて来る時には、一般にそんな呼び方はしてゐても、宗通の妻は彼女よりほかにはない権威を重んじて、富士見町では必ず夫人の妙子が出るが、今朝は秀通自身であつた。話された内容は、時刻を無視したのも、また彼のいつにないせかせかした調子も、無理がないのを証拠だてた。とみも、恐れ入りますが、後ほどのことにして頂きたいのでございますが、といつもそんな時の電話を断わる断わり方はしないで、

「ちよつと、お待ちあそばして。」

と繋いだまま宗通に通じたのである。

「何だと。」

舞扇で軽く膝を打ちながら、これから舞はうとする「遊行柳」のキリのノリ地の調子をとつてゐた宗通は、言葉といつしよにぴたと手を留めた。耳にした報告がほんとうかどうか疑ふやうに、そのあひだから高い鼻が突き出てゐる眉根に、二つの小さい瘤になる皺を寄せた。彼の蒼白な艶のない細面には、こころもち段になつた鼻が水分嶺をなしてゐた。さうして両側がどこか歪に見えるのは、曾つて顔面神経を煩つた名残りで、気永い電気療法できれいに治つたことになつてはゐるが、光線の加減では、顔の幅の割には大きな口の右の隅が、こめがみと対角線をなして引き吊つてゐるのがわかる。

なにか癇に障はることがあると、眉根の瘤の上に、生えあがつた額を横ぎつて青く膨れる静脈とともに、その引きつ吊りが目だつ。細いが澄んだ眼をして、溝で線を引いた長い眼尻が、それを鋭くしてゐる。宗通はその眼を一二秒くうに据ゑてから、小刻みな瞬きをしてつけ加へた。「委しいことが聞きたい。秀通に来いといひなさい。」

「はい。」

とみはいつものこだまのやうな答へ方をしたが、そのあとに丁度宗通がおいたほどの間がおかれた。つづけた言葉は稀有な問ひ返しであつた。「只今からお出で頂いてよろしいのでございませうか。」

「うむ、すぐ呼んでくれ。」

宗通は舞袴を脱いだ。朝の稽古が中止されたのである。これも稀有なことであつた。彼は机にむかつて坐り、蒔絵をおいた桐胴の火鉢に女のやうな華奢な手をかざしてゐたが、急にその手が伸びて、まへの花燈窓をさつと開けた。畳廊下のそとの雪景色の庭は、障子の嵌め硝子を通してよりもひろびろと視野にはいつた。能以外にはけちなほど金を使はず、植木職さへ常雇ひは入れてゐない庭は、広大なだけに荒れがだんだん眼だつて来たが、この頃の降りつづく雪で幸ひそれは蔽はれてゐる。しかし伸び過ぎ、枝を張り過ぎた木立が、背景になつた染井の森に連り、深山めいた静けさの底に、一種気疎く、凄味に似たものを馴れないものが感じさせられるのは、森の向側が共同墓地であるばかりでなく、もつと手近く、庭の一方の縁にそうて苔蒸した石の玉垣で限られてゐるとはいへ、江島家の大名時代からの累代の墓地が横たはつてゐるからである。弟の秀通に伯爵の地位をゆづつて、隠居とともに宗通が択んだその邸宅も、むかし墓参の便宜に建てられたものに過ぎず、ことに焼けて十数室し

か残さない家は、彼の生活を一層閑居らしくした。

雪はつづいてゐる。淡灰いろの雲の底に隠された形のない篩で、わりに大粒で、空間いつぱいに振り落される白い点点をぢつと眺めてゐる宗通の細い澄んだ眼は、溝になつた、日によると、女のアイシャドウのやうに黝ずむ眼尻の線をだんだんと厳しくした。彼は見てゐるものを、見てゐたのではなかつた。そのこころは、もう一世紀近い過去になつた同じ雪の日に飛んでゐた。万延元年(一八六〇年)、当時の徳川幕府の大老たる江島近江守が、三月三日、上巳の節句の祝賀に登城する途中、水戸の浪士から桜田門に要撃されて落命したことは、日本の近世史上でもつとも著名な事件であつた。宗通は彼の孫にあたつてゐた。同時に彼の人生哲学——といふ言葉が大き過ぎるなら、一種厭人的で、この社会に希望も、期待も持たず、早い隠居で、世捨人となつて、好きな能楽に逃避してしまつた心理には、その歴史的な一日が基礎的に影響してゐた。今朝電話で伝へられた若い将校らの反乱も、それが同じく雪の日の出来事でなかつたら、重臣たちの家に機関銃を打ちこまれようと、それで幾人殺されようと、宗通に日課を中止させるほどの衝撃は与へなかつたに違ひない。たとへば、ほんの一歩先の血の足跡であつた犬養首相の暗殺を耳にした時でも、丁度午後の書見のをりで、読んでゐた花伝書から彼は二分と注意をそらしはしなかつた。

弟は兄を長くは待たせなかつた。どんな場合にも守られる従順は、長上に対する尊敬や愛情よりも、もつとこみ入つた問題に結びついてゐた。宗通の隠居によつて秀通が家督を嗣いだのは二十年前であるが、貰つたのは、世襲財産以外はほんのわづかで、旧領地の方に持つてゐる土地、田畑、山林の殆んどすべてがまだ兄の名義であつた。満洲事変の前後から、用心深い金持連があさりはじめたポンド

やドルも、旧藩出身で、丁度三井銀行のロンドン支店長をしてゐた男の手で、少からぬ額が買ひつけられたのを噂として聞いてはゐるが、委しいことは知らなかつた。しかし貴族院に於ける秀通の勢力は、地位や政治的な手腕のみでなく、能のこと以外には使はれない、兄宗通の遊んでゐる経済力が大きな背景になつてゐた。それも、他に対して見せかけてゐるほどの利用は決して許されないのだから、兄の機嫌はどんな場合にも程よく取り結んでおかなければならず、その心遣ひにはブローカーじみた打算がつねに潜んだ。それ故、その朝も事件のいろいろな聞きこみを携へて来た客と、いつしよに倶楽部に出かけようとしてゐた自動車を、そのまま染井の方へ廻させたのである。

牛込、小石川、本郷と乗りでのある距離を飛ばせて行くうちにも、電話室で、すぐ訪ねる旨の返事をしながら示した渋い顔は、すぐには消えなかつた。出来事の重大さは、一般の人間よりは筋道が辿れるだけ、また複雑な利害が絡んでゐるだけ彼の胸を圧してゐるので、染井くんだりまで、余計な暇潰しをさせられる忌忌しさもなくはないが、それよりもなほ兄との対談には一つ弱ることがあつた。なにか大切な話になると、宗通は相手の言葉を遮つて必ずいふ。

「他聞を憚かる、書いて貰はう。」

鉛筆がわたされ、話は筆談に代つてしまふ。かうして問答風に書かれたものを、彼は手にとつて、もう一度ゆつくり眼を通してから、保存の必要がないと見ると、また必ずいふ。

「他見を憚る。これは火中しよう。」

かうして筆記された紙は燃されてしまふ。秀通に対する場合のみではなかつた。その他の親族や、旧臣関係の人人との接触でもみなその行き方で、それは飽くまで几帳面な彼の生活様式を見せるのみ

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo